

つかない。母ザルがパネルを押して、装置を去るとその一瞬の間にポンと1〜2回パネルを押すのみである。次にもしゴザル一頭だけで装置の前へ来てもパネルを押すことはない。この意味で、行動獲得には結びつかない。又は、潜在学習として将来働く先天的な行動であると考えられる。

課題 5

チンパンジーにおける刺激等価性 —推移性(transitivity)の成立条件—

山本淳一(慶大・心理)

ヒトの言語獲得においては、いくつかの刺激間の特定の関係を学習すると、当該刺激について、直接訓練を受けていない刺激間へも般化が及ぶことが知られている。このような刺激等価性は、対称性(symmetry)と推移性(transitivity)の2つから成っていると考えられる。本研究は、対面場面での恣意的見本合わせを通じ、チンパンジーにおける刺激等価性の成立条件を検討することを目的とする。被験体として、人工言語習得訓練を受けているアイを用いた。昭和60年度は、色とレキシグラムを用い、対称性の成立条件を検討した。その結果、通常の訓練のみでは対称性が成立しないことが示された。本年度は、以上の2つの刺激に漢字を加え、3つのモードの刺激間で、推移性が成立するかを検討した。

まず、〔赤・黄・緑〕についての9種の刺激を用い、見本刺激をレキシグラム、比較刺激を漢字として見本合わせ訓練をおこない、学習完成後にテスト・プローブにより、推移性(見本刺激は色、比較刺激は漢字)および逆方向の推移性(見本刺激は漢字、比較刺激は色)の成立の有無を調べた。その結果、推移性は成立し、逆方向の推移性は成立しないことがわかった。〔紫・橙・黒〕を用い、色と漢字との間の訓練を施行し、レキシグラムと漢字との間の推移性および逆方向の推移性を調べた場合も、同様の結果が得られた。

以上のことをまとめると、チンパンジーにおいては、刺激等価性のうち、対称性はたいへん成立しにくいのが、推移性は通常の手続きで十分成立することがわかった。

ヒトの場合は、発話のみられない子供の場合で

も、推移性が成立しないことはあっても、対称性は、ほとんどの場合成立することが知られている。このことは、チンパンジーにおいては、各刺激の機能が固定化する傾向が強く、刺激間の一対一対応の成立が妨げられやすいことを示唆している。

ヒトおよび大型類人猿の認知発達と比較

田中昌人(京大・教育)・竹下秀子(滋賀県立短大)

従来、1〜2才のヒト乳幼児を対象とした発達診断でもちいられてきた検査課題(積木・はめ板入れ子)を大型類人猿に実施した。被験体は、チンパンジー6頭(オス・9才、4才、メス・9才、6才、4才、2才)、オランウータン1頭(オス6才)であり、検査者が検査用机をはさんで(6才以上の被験体はケージ越しに)対面しつつ、積木課題はすべての被験体に、はめ板課題、入れ子課題は4才以下のチンパンジー3頭に実施した。各課題1セッション10分前後であり、1〜2週間隔で数セッション実施した。

積木課題：2個の積木を机上に呈示したのち、まず一方を他方に積んでみせる。次に「積んで」と声かけながら同じ2個の積木を被験体の前に差し出す。被験体が積みめば、順に個数をふやすという手順を基本とした。結果は、すべての被験体が短期間のうちに積木を積むようになり、7頭中5頭はヒト2才未満の標準である6個まで積み続けることが可能であった。壊れたばあいには自発的に積みなおすなど、積むという動作の一次元的継起性はヒト1才半前後の発達の特徴に比肩するものであった。

はめ板課題：新版K式発達検査に準拠し円板回転、はめ板・全を実施した。4才メスでは円板回転でお手つき反応、はめ板・全でひとつの孔にひとつの板という対応(ヒト1才半未満)がみられた。他の2頭は位置反応(ヒト1才前後)に終始した。

入れ子課題：8つの器が入れ子になった状態で呈示したのち、大中小の器を右中左と適宜位置を変えて机上に並べた。8頭とも、大中小の入れ子(ヒト1才9か月未満)は偶発的にしかつけれないが、1試行中、数回の出し入れを繰り返して3つの器をひとつに重ねあわせようとした。以上、3種の検査課題に対する大型類人猿の反応は、基